
その想いは変わりますか？ AFTER STORY

畑山香樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その想いは変わりますか？ AFTER STORY

【Nコード】

N0684S

【作者名】

畑山香樹

【あらすじ】

『その想いは変わりますか？』の七年後のストーリーです。

登場人物は『その想いは変わりますか？』の方を見てください。
かなり短いです。 基

本一人称は、主人公の彼女である穂菜ちゃんです。

短いいえ女の子をメインにするのは初めてなので、ちゃんといけるのかどうか不安ですが、頑張っていきたいと思います。

感想評価をお待ちしています

第一話 『七年後もいちゃいちゃやってます』

とある町にある五階建てのマンションの四階の一番奥の一室。
そこが私と、私の好きな人が住んでいる部屋。

その部屋で私は、

「ちょっと夕馬！テレビなんて見てないで掃除やってよっ！」

好きな人を叱っていました。

「掃除って、まだやらなくてもいいでしょ。それに僕料理作ってるんだから、掃除くらいは穂菜がやりな。休みの日はゴロゴロさせてよ」

夕馬は一向にして座ってるソファーから動こうとしない。

「私だって仕事してるんだから、そんな言い訳通用しないよ！」

「だから、僕は料理してるんだって。掃除くらい女がやればいいじゃない」

「そういうのは偏見でしょっ！！夕馬最低だよ！」

「最低で結構。さっさと掃除やりな」

シッシツと手を振る夕馬。

私はもう我慢の限界が訪れた。

「ゆうまக்குううううつんっ！！もう無理っ！！ごめんなさああああああいつ！！」

泣き叫びながら、でもマンションということを考慮して極力音量を小さくしながら夕馬くんに抱きついた。

夕馬くんはよしよしと頭を撫でてくれた。

「ごめん、僕もそろそろ無理だった。よく頑張ったね」

「ううう、ほんとごめんなさい。私から言っただのに……」

そう、これは私から夕馬くんをお願いしたのだ。

喧嘩する彼氏彼女を演じてほしいと。

それなのに自分が先に限界を迎えちゃうなんて……。

「だから、わざわざそんなことしなくてもいいでしょ？参考にしたのなら梨久にでも頼めばよかったんだし」

「で、でもでも、梨久ちゃん私が本書いてるって知らないでしょ？なんか恥ずかしくて。それに梨久ちゃんだって忙しそうだし」

私がそれを夕馬くんに頼んだ理由、それは私の仕事に関係する。

大学在学中に小説書いて二、三度投稿したら、それが当たってしまっています。

そしたらそしたら、本として出してしまいませんか、というご提案

をいただきました。

今ちよつと気持ちが分らないところがありました。

そして夕馬さんに頼んで喧嘩を試みたんですが……。

実際夕馬くんを罵倒してる罪悪感しか生まれずにそれどころではなくなってしまうて、この状態になってしまったというわけです。

因みに私たちは付き合ってから七年、自他共に認める程にラブラブで、それはこのマンシヨンの中でも周知の事実で、いちゃラブカップルという称号をもらった。

しかもこの称号の凄いのは、大学を卒業してからここを借りたんですが、まだ二ヶ月も経っていない。

それでマンション中に知れ渡っているのは、恥ずかしい気持ちもあるけど、誇らしい気持ちもある。

「で、どうするの？ 書けそ？」

「う、ううん。分かんない……」

「ん、快斗たちに聞いてみる？」

「へ、平気かな？」

「多分ね」

夕馬くんは電話を取り出すと、快斗くんは電話を掛ける。

「もしもし、快斗？あのさ、どっちか来れる？……はい。……
……じゃあ頼む。……そうそう、それ。……はい。ん、じゃね」

ピツと電話を切った。

「来れるって」

「よかった」

快斗くんたちも私たちと同じマンションの一階下に住んでいる。
多分すぐ来てくれると思う。

「えと、なんか用意した方がいいかな？」

「ん、確かキッチンの一番右上の棚にあったような……」

え、それって……

「あ、違う。それ穂菜のマル秘小説だった」

「え、ちょま、え、ちょつちょ！？ゆ夕馬くん！？な、ななななん
でそれ知ってるの！？」

「なんでって、穂菜にさっき掃除してって言われたから、過去に戻
って隅々掃除したんだよ」

「な、何それ！？」

「いや、驚きだったよ。二重底は定番だけど、まさか奥に二枚板貼
ってるなんて。しかも天井、って言うのかな？まあ取り敢えずその
上にも貼って。奥の二枚を外さないとなが外せないっていう巧妙な
三重の仕掛けをして。僕にあんなことしてほしかったの？」

「う、ううう……」

私は瞳に涙を浮かべながら頂垂れる。

私が隠した、夕馬くん曰くマル秘小説は、その、高校……二年の頃かな？

ちよつとえつちなもので、興味本意で書いてみたんだけど、いざ完成すると恥ずかしくなって。

でも捨てたら、誰かに見られちゃうんじゃないかと思ったら捨てられなくて。

燃やせる場所がなかったのずっと持ってたんだけど。

「その……ごめん、なさい……。ズズツ、軽蔑、したよね？」

もう諦めてたとき、ぎゅつと抱き締められた。

「だあいじょあぶ。ちよつと驚いたただけだから。まだ好きだよ、穂菜。誰にも言わないし、あそこからも出さないよ。ていうかああいうのに興味持つのは普通でしょ。泣くほどじゃないよ」

「……ほんと？」

「ほんと。だから」

夕馬くんは指で私の涙を拭ってくれた。

「もう泣かないで、顔を真っ赤にして恥ずかしがって僕を悶えさせて」

「……え、その、夕馬くん？な、なんか話が違くない？」

「合ってるよ。周りの空気が変わるんだから。そんな泣いてる穂菜より、まだ恥ずかしがってる方が嬉しい。だから、穂菜は僕を喜ばしてよ」

「……うん」

私は夕馬くんと同じようにぎゅっと抱き締めた。

「ちょっと快斗さん、これどう思います？」

「んー、これはですね、千佳音さん。わざわざ俺たちを呼んで抱き合ってる姿を見せるなんて、見せつけたかったんじゃないのかな？」

ぎぎぎぎ、と私だけでなく夕馬くんも声のする方へ首を向ける。

そこには、先ほど夕馬くんが呼んでくれた、快斗くんと千佳音ちゃんがひそひそ話をするように、でも音量は私たちに聞こえるように会話をしている。

「あ、ああ、あの、二人とも、どこ、どこから？」

「『周りの空気が変わるんだから』からだよ。ねえ、なんなの？何してるの？」

千佳音ちゃんにジト目で睨み付けられました。

「え、えつと……夕馬くん」

「ただ愛を確認してただけだよ」

そう言って私から離れた。

快斗さんと千佳音ちゃんは、私たちが付き合いはじめて三ヶ月後くらいに付き合い始めた。

切っ掛けとかは特にないらしく、いつの間にか付き合い合うか、っていう話になって、今じゃこじれることもなく仲良く同姓中。

「何それ？あんたたちそろそろ行ったら人前でチュッチュしちゃうんじゃないの？」

呆れながら千佳音ちゃんは言う。
私たちそこまで見られてたんだ。

「流石にそんなことはしないって」

「そうだよ。そんなことしたら周りの人が夕馬くんを引いちゃうでしょ？」

夕馬くんが周りの人に嫌われるのは嫌だ。

「うん、僕も穂菜が引かれるのは嫌だね。だから家の中でしかない」

「夕馬くん……」

好きな人と同じ気持ちになれたのは、とっても嬉しい。

「……千佳音、ごめん。俺あそこまでお前愛せない」

「安心しなさい快斗。わたしもあんなの無理。いつも通りで許して

ね」

いきなり二人が謝り出した。

なんでだろう？

さっきまで喧嘩でもしてたのかな？

……あ、喧嘩。

「ねえ快斗くん、千佳音ちゃん、聞きたいことがあるんだけど、いかな？」

「何？小説のことでしょ？俺らで答えられるならいいよ」

二人は私が小説書いてること知っていて、よく協力してくれたりしてくれている。

「今ね、恋人同士が喧嘩する心情が知りたいんだけど」

「へ？そんなの聞かなきゃ分かんない？」

千佳音ちゃんが意外そうな顔をする。

「だ、だって、私夕馬ちゃんと喧嘩したことないから……」

「千佳音、こういうやつらなんだよ」

「……そうだったね。あんなたちそっぴい一度も喧嘩したことないんだね」

「千佳音は最近喧嘩した？」

「ん、最近は……なんであのマンガ買ってこなかったのよ!? でもめたかな」

「あれはしょうがなかったんだよ。人がいっぱいいたし道の途中で困ってる人がいたし」

「随分しょうもないことで喧嘩してるね二人とも」

「いいだろ別に。喧嘩するほど仲がいいっていうし。なあ千佳音」

「その通りだよ快斗。喧嘩しない方がおかしい。そんなことじゃすぐに破局するから」

それを聞いて、私はちよつとムキになった。

「そんなことないもんっ！ 私たちずっと一緒だもんっ！」

「どおかな。喧嘩しないってことは、自分の意見が言えてないってことでしょ？ そんなのいつか破裂しちゃうよ？」

「別に喧嘩しなくても、そんなの話し合いで解決できるよっ。現に私も夕馬くんにいっぱい意見言っだし、夕馬くんも私にいっぱい意見言っし」

「ま、一言で言っちゃえば人それぞれっていうことで」

「まとめるな夕馬。で、話戻すけど穂菜、喧嘩ってどういうシチュ？ やっぱそれぞれだと思うんだけど」

「あ、えっとね、そういう細かいのじゃなくて、喧嘩してるとき」

て相手のこと嫌いになっちゃうのかなって。それが分かんなくて。喧嘩してる最中も好きなままなのかな？」

うーん、と唸る快斗くん。

時折胡座をかいている膝の上を置いてる手で叩く。

「そんなこと考えたことねえな。千佳音どうよ？」

「そう、だね。必死過ぎて好きか嫌いかなんて思わないよね。よく言うでしょ？頑張りすぎて周りが見えなくなる、とか。喧嘩してるときは、ただ？どうにかして自分の意見を聞き入れてもらわないと？とか？どうして自分の意見が分からないの？しか考えてないと思うよ」

「なるほど……ありがとう、快斗くん、千佳音ちゃん！」

「じゃ、二人はもう用なしだから帰って」

「「もつと他に言葉があるだろ！」「」」

「二人とも息ぴったりだね。ちょっと待ってて。今お菓子持つてくるから」

「ども」

「ありがと」

「穂菜は飲み物お願い」

「うん。カルピスでいい？」

「お構い無く」

ひらひらっくと千佳音ちゃんは手を振る。

私たちはキッチンまで行って色々用意した。

第一話 『七年後もいちゃいちゃやってます』（後書き）

夕馬「どうも皆さん、22歳の樋口夕馬です」

穂菜「同じく22歳の種原穂菜です」

夕「なんか僕たち復活したね」

穂「うん。アフターストーリー読みたいって人がいたし、作者もちよっただけどう書こうか思い付いたらしいし」

夕「それで、どうして今日この日三月三十一日に投稿したかという
と、作者の誕生日だからです」

作者「どうも、作者です。二人とも久しぶり。まあ『四人の魔法
使い』でちょこっと出てきたけどね」

穂「でも私たちは七年ぶりっていうことになってるよ」

作「まあそうだな」

夕「作者誕生日おめでとう」

作「いやお前いきなりだな!？」

夕「早めにやっておいた方がいいかと思って。ほら」

作「ん？」

夏哉&真樹&謙一&なのは&ワイラ&ナイメ「「「「作者(さん)ッ!」「「「「

穂「うわっ、人がいっぱい」

真「……え？穂菜、さん？」

穂「うん。そっちから見たら七年後の私だよ」

夏「え、それって、どう言うこと？」

タ「つまり、次の小説は『その想いは変わりますか?』のアフターストーリーってこと。作者いわくかなり短いよ」

な「本当なのっ!？」

作「うん。十話にまとめるつもりだし、一話も二、三ページで抑えるつもりだから」

ワ「んゝ、なら大丈夫、なのか？」

ナ「いや、結局遅れることには変わらないし」

タ「……きみ、ワイラ・テイルスキ？」

ワ「そうだけど」

タ「いろいろ大変だと思うけど、頑張ってね」

ワ「はあ
」

作「はあい！ではみんなお疲れそろそろここで終了とさせていただきます。ではでは。小説は完結させるんで楽しみにしてください」

第二話 『え、これって主人公がやることじゃ』

私は快斗君と千佳音ちゃんに、今執筆中の小説を見てもらってます。

やっぱり読者の声って言うのは必要だね。

因みに恋愛系を書いてる。

「どうかな？」

「うん、俺は面白いと思うよ」

「わたしも。でもさ、この最初の方のデートって、あんたらの実体験じゃないの？」

「あ、分かつちゃった？」

「分かつちゃった？じゃないわよ。今まで何度聞いたことが……」

少しげんなりしてる気がするけど気にしない。

「だって、夕馬くんすごい楽しいところにつれていってくれるし、いろいろ気を使ってくれるんだもん。凄くネタが書きやすくて」

「いやいや、別に僕が特別なことしてるんじゃないくて、穂菜と一緒にだから、自然と楽しくなるんだよ」

「夕馬くん……。うん、そうだねっ。多分私も夕馬くん以外の人とでも、どんなところに行っても夕馬くんと以上には楽しめないよ」

「ありがとう、穂菜」

「どういたしまして、夕馬くん」

お礼を言われて私は頬が緩んでしまう。

「ねえお父さん！わたしも夕馬ん家の穂菜ちゃんみたいになってほしい〜！お願い〜！！」

するといきなり千佳音ちゃんが快斗君の袖をクイクイツと引っ張って駄々をこねる。

「誰がお父さんだ。俺はやんねえよ」

「え〜」

「えーじゃない！ここで俺らまでボケたら収集つかねえだろ！！」

「僕たち別にボケて」

「うるせえ！だいたい穂菜はともかくてめえは確信犯だろ！！それから！俺は千佳音の彼氏以外認めない！！」

「いやあああんっ！さっすが快斗っ！なんやかんや言ってわたしとラブラブ空気作ろうとしてるう！大好きっ！！」

千佳音ちゃんはすごい喜びながら快斗君に抱きついた。

快斗君も千佳音ちゃんを優しく抱き締める。

私は夕馬くんを見る。

夕馬さんと目が合った。

「この二人すごいラブラブだね」

「うん。ちょっと引くわ」

「「アンタらが言うなっ!!」」

私たちは二人にツッコまれた。

二人は離れた。

「あ、ねえねえ、話少し変えちゃダメかな？」

「ん？わたしは構わんよ」

「えっと、ちょっと待ってて」

私は、立つのがめんどくさかったのでハイハイして目的の鞆のなかに入っている原稿用紙を取る。

そうしていると、後ろから声が聞こえた。

「穂菜ちゃんっておしりちっちゃいな」

「ほえっ!？」

いきなり変なことを言われたので、慌ててお尻を片手で隠す。

後ろを振り返れば、私のお尻に顔を近付けている千佳音ちゃんが

た。

「うわあああっ！？」

驚きのあまり叫び声をあげてしまい、お尻を遠ざけようと膝を動かした。

しかしその時千佳音ちゃんの腕に当たってしまった。

ぼふっ。

千佳音ちゃんの顔が私のお尻に埋めた。

「え、あ……」

「きゃああああああああああああっ！！」

先程より大きな叫び声をあげた。

「うつうつ……」

私は壁際で踞った。

もう恥ずかしくて死んでしまいそうだ。

知人しかいないといっても恥ずかしいものは恥ずかしい。

「あ、えっと、穂菜ちゃん？ほんとごめんね。悪気はなかったの。」

ただ単にいいな〜って思っただけで。百合とか、お尻フェチとかじゃないからね？」

ちらりと、少しだけ顔をあげれば千佳音ちゃんが必死に謝ってるのが見えた。

「千佳音ちゃんのせいじゃないよ。ただ私が、あんなことで何叫んでるんだろって思って、それが物凄く恥ずかしいだけだから」

「や〜やめて！なんかこつち物凄く罪悪感生まれてるから！！あ、そうだ！穂菜ちゃんもわたしのお尻にダイブすれば」

「何くちばしってんだよ。テンパリすぎだお前」

パシッと快斗君が頭を叩く。

「夕馬、なんとかしてやってくれ」

「はいはい」

そう言つて夕馬くんは腰をあげて私の近くまで来ると、両手で私の顔をあげて視線を交わらせる。

そして。

夕馬くんはキスをした。

「「ブツ!？」」

どこかから吹き出すような音が聞こえたけど、今は置いておく。

夕馬くんのキスを味わおう。

しかし夕馬くんはすぐ顔を離してしまった。

ううう、もうちょっとだけ。

ねだるように夕馬くんを見れば、頭をなでなでされた。

「また後でね。それより、なんか僕たちに見せたいものがあるんじゃないの？」

「あ、うん。ちょっと待っててね」

私はさつき取り出せなかった原稿用紙を取り出す。

三人のもとに戻れば、快斗君が夕馬くんに質問した。

「あの、さ、夕馬君？確かに俺はなんとかしろとは言いましたよ？でもなんでちゆう？」

「だって、一番元気にならない？」

「う、うん、それはなんとも言えない気がするな。どう快斗？」

「い、や、なんかちがくね？てかもしかして夕馬も天然になった？」

「そんなことはないよ。ただ、どうすれば穂菜が元気になるかって考えたらあれが簡単だったの。ね、穂菜」

「うんっ」

「簡単、だと思うか？」

「いいや、わたしにや無理さ。ごめんね快斗君、知り合いとはいえ人前でチューは出来ない」

「安心しろ、俺も無理だ」

「わあい！以心伝心〜！！」

「以心伝心っていうか、これが普通なんだけどな。向こうが異常なだけで」

「「僕（私）たち普通だよ？」」

「で穂菜、見せたいやつって」

スルーされた……。

少し気分を下げながら、持ってきたものを見せる。

「えっと、一応新しいやつを書いてみたの。キャラを私たちに似せて。ちょっと感想がほしいなって。全然出来てないんだけどね」

それを渡すと、三人一緒になって読んでくれた。

第二話 『え、これって主人公がやることじゃ』（後書き）

快斗「二話投稿ばんざーい！源快斗です。快人じゃなくて快斗です」

千佳音「感想でいっぱい間違えられちゃってるからね。嬉しい限りです」

快「なんで!？」

千「たくさん間違えられるってことは、たくさん感想が来てるってことでしょ？colorfulさん、kittiさん感想ありがとうございます」

快「あ、ありがとうございます、でいいの？」

千「いいのいいの。ところでさ、作者からもらったんだけど」

快「何を？」

千「きゅうりのぬか漬け」

快「何故に？」

千「活動報告のところにガスキンからの贈り物。誕生日プレゼントだって」

快「見てないかもしれないけどガスキンさんありがとうございます！じゃあいただきます」

ぱりぱりぱりぱり

千「ごちそうさまでした」

快「ごちそうさまでした」

千「よし、やることなくった」

快「まあな。あ、そういやさ、感想であつた仕事何やってますかっていう質問に答えよーぜ」

千「やだ」

快「やだつて……」

千「言いたくない！言ったらみんなに引かれる」

快「穂菜は小説」

千「だから言うなつて！嫌いになるよ！！別れる別れる！！」

快「別に構わんよ。で、穂菜は小説家、夕馬は古本屋の正社員、俺は」

千「え、ちょ、や、快斗？ちょっと冗談だつてば。こんなことで別れないつてば。ねえ、好きだよ快斗」

快「大丈夫だつての。俺も別れる気は更々ない。てか必死こいて幸秀さん説き伏せたつていうのに別れたら死ぬわ」

千「あ、うん。そうだったね……」

快「そういうこと。まあそれ抜きにしてもお前のこと好きだし」

千「ありがとう。では皆さん、たった二ページですが読んでくれて
ありがとう！感想評価待ってます」

第三話 『他人が見る、自分の慣れないことはしないように』

「何これ？」

夕馬くんたちに新作小説を呼んでもらって、最初に言われたことがこれだった。

「えっと、夕馬くん？もしかして、つまらなかった？」

確かに試作品、というか、試し書きなんだけど、そう言われたらちよっと不安になる。

「俺はいいと思うけど、千佳音はどう？」

「わたしもいいって思ったよ？夕馬どこがダメなの？」

「いや、いい、ダメの問題じゃなくてさ、これ、僕たちをモデルにしたって言ってたでしょ？」

「ああ、確かに言ってたな」

「つまりさ、この主人公とその友人って、どっちがどっちだかは置いて、僕たちでしょ？この二人を地の文がBＬチックにしようとしてるでしょ？心が通じてるとか相性バツチリとか。普通に読めば普通の言葉だけど、ちよっと意味を変えればそっち系な意味にとれる」

うっ、夕馬くん、痛いところをついてくる……。

「つまりそれは僕と快斗の絡みが見たいっていう穂菜の願望が表れてるってこと」

「……いやあ、それはちよつと無理ありすぎない？確かにそういう意味にとれるけれども、気にするようなものではないと思うけど」

「千佳音に一票。そりゃ流石に自意識過剰ってやつだろ。それとも何か？そういう本でも読んで意識しちゃったか？」

快斗君がからかうように聞いた。

あれ？

ものすごくいやな予感がする。

「あ、うん、ちよこつと読んだよ」

「「う、えええっ!？」」

夕馬くんの爆弾発言に二人は驚く。

私は冷や汗が止まらない。

「まあ、といつても最初の方だけだったけどね。タイトルは『マリナの男……』」

「ふみやあああああっ!?!なんで夕馬くんが知ってるの!?!私あれ引き出しの奥にしまっ」

シーーーーーーン。

しばし誰も動かなかった。

「ということで、最近BLにはまってるからそう思ったわけです」

「「納得」」

「それから穂菜、その本は探した訳じゃなくて普通に机の上に置いてあったからね」

「え……」

ぽくぽくぽくちーん。

「ああああああああっ！？もしかしてあの時！？イヤアアアアアアッ！！ち、違うの夕馬くん！あれは担当の人から貰ったものでね！こういう方が今の女の子には受けるって言われたから読んでみただけなの！！」

「「……そうなんだ」」

「快斗君！千佳音ちゃん！そんな低いテンションで納得しないでよっ！！」

「穂菜、大丈夫だよ。僕はそんな穂菜を応援するよ。まあ穂菜のために男を好きになれって言うのは無理だけど。で、穂菜。お前にひとっ」

「な、何？」

恥ずかしくて膝に埋めていた顔を上げる。

「なんで僕と快斗がモデルなんだ」

ペシッ。

頭をはたかれた。

「ううう、痛いよお」

「自業自得だ。そういうところは消しなさい」

「はあゝい」

結構よかったと思ったんだけどな。

「あ、言うの忘れてたけどさ」

「ん？何？」

「話は凄い面白かったよ」

「え、ほんとっ？」

「うん。快斗と千佳音も言ってたでしょ？ほんとだよ」

「そ、そっかゝ。それじゃあ、うんっ、がんばるねっ！」

「頑張れ。で、二人はどうして固まってるの？」

「へ？」

快斗君と千佳音ちゃんを見ると、夕馬くんの言った通り口を半開きにして固まっていた。

「え、快斗君、千佳音ちゃん、どうしたのっ!？」

「や、い、え、だ、だって、千佳音、なあ？」

「う、うん、ねえ快斗、今、夕馬が……」

「僕？」

私たちは顔を合わせて、首を傾げる。

「「夕馬が穂菜を叩いた」」

「……は？」

私は変な声をあげてしまった。

夕馬くんが私を叩いただけでどうしてそんなに驚くんだろう？

隣では、ああ、と納得した様子の夕馬くん。

「夕馬くん、どういうこと？教えて」

「つまり、二人は僕が穂菜の頭を叩くとは思わなかったらしいの」

「だ、だって！ゆ、夕馬が！夕馬が叩くなんて！！」

「そうだよ！二人めっちゃラブラブなのに！しかも夕馬からとか！おかしいだろ！！絶対明日雨とか槍とか降るってッ！！」

「雨と槍の差が激しすぎでしょ。てかそんなことで大騒ぎしないでよ。こんくらい普通でしょう」

ペシッ

もう一度頭を叩かれた。

「ううう、何度も叩かなくていいじゃんっ」

バシッ。

今度は私が夕馬くんの背中を叩く。

「「いやああああああっ！！」」

すると二人は叫び声をあげた。

「ちょっとまって！今日やばいでしょ！！絶対何かあるって！！」

「あ、あれじゃない！？ナツチャンでも怪我してくるんじゃないの！？」

なんか、凄い酷いことを言われている気がする。
というかどうして梨久ちゃんが出てくるんだろっ？

「ほら二人とも叫ばないの。静かにしないと穂菜の料理食べさせるよ?」

「.....」

うわー、一瞬で静かになった。

.....夕馬くんにもひどいこと言われちゃった。
これでも少しは成長したのに。

この沈黙の中、ひとつの音が響き渡る。

千佳音ちゃんの携帯電話だ。

「ああ失礼。お、恵里ちゃんだ。もしもし。.....へ?ええええええええつ!?!」

突然叫んだのでビクツとなった。

「う、うんっ、で?.....そうか、分かった」

携帯を閉じると、少しだけ青白くなった顔をこちらに向ける。

「ナツチャンが怪我した」

第三話 『他人が見る、自分の慣れないことはしないように』(後書き)

穂菜「第三話」

夕馬「作者の計算なら後七話だって」

穂「文章も話数も短いね」

夕「そうだね。そして後書きも短い」

穂「もう作者めんどくさくなっただろうね」

夕「うん。じゃあ皆さん、また今度」

穂「colorfulさん改めてcoltityさん、kittinessさん感想ありがとう！」

第四話 『何か計画を立てているようです』

「夕馬く〜ん、明日だね〜」

「二十五回目だけど、そうだね」

「へへっ」

こんな訳で、今ソファーに座って夕馬くんと一緒にテレビを見ている私は浮かれています。

ちゃんとテレビも見てるよ？

明日は六月二日。

この日は七年前、私が夕馬くんの告白を受けた日だ。だからそれを記念して私たちはその日にデートする。

因みにその三日後には初デート、初キス記念と題してちょっと豪華な料理を食べる。

シェフは快斗君。

参加者は基本四人で、過去六回中二回ほど梨久ちゃんが参加した。今回はどうも来れなさそうとのこと。

「ねえ穂菜。小説の方は大丈夫なの？ここで？間に合いませんでした？って言われるなら気が引けるよ？それに五日にもあるんだよ？つらくない？」

夕馬くんが心配して気遣ってくれている。

私はそれに、大丈夫と答える。

「だいたい話の構成は作ったからね。後は二日三日引きこもってたらなんとかなるよ。今日も今休憩したらやるから。だから安心して」
そう言っただけは笑った。

すると夕馬くんは私の髪を梳いてきた。

「別にね、無理とか無茶とかするとか、そんなつらいんならやめなとかは言わないけど、疲れてるのだけは隠さないでね。僕は穂菜のやることは止められないし止めるきもないけど、気遣いくらいは出来るから。分かった？」

夕馬くんは怒った風でも、心配する風でもなく言った。

例えるなら確認、だろうか。

私に、そうできるよね？と確認するように言っているのだ。

そんな夕馬くんの言葉に、私は素直に答えた。

「うん。実はかなり疲れ気味。もうそろそろ隈が出そうかも」

自分の目をこすりながら言う。

「その隈直してよ。その状態でデートっていうのは変な意味で目立つよ」

「う、そうだね……。今何時？」

「おやつ時間プラス七分」

「ちょっと寝ようかな。夕馬くん、覚えてたら五時に起こしてくれ」

ないかな？」

「いいよ。風呂どうする？起きた後入る？」

「お願いできる？」

「いいよ」

「ホント夕馬くんありがとう。助かるよ」

「まあこれも主夫の役目だからね。働く奥さんを陰ながら支える夫。これも板に付いてきたからね」

「わ、私たちまだ夫婦じゃないよっ」

「でもまんざらじゃないって顔してるよ」

「確かに、嬉しいけどさあ。あ、そういえば夕馬くんは仕事平気なの？今日と明日連続で休み取っちゃって」

「うん。それなりに店長からも信頼もらってるからね。二日くらいならいいだって」

「そうなんだ。夕馬くん凄いね」

「ありがとう。じゃあ引き留めてもあれだしね。おやすみ」

「うん。おやすみ」

私は隣のちょっと小さい寝室に入って仮眠を取った。

僕はこっそり寝室を覗き見る。

昼なのにカーテンも閉め切っていて、戸を開けた光しかその空間を照らしていない。

その中で一人の女性が可愛らしい吐息を立てて寝ている。

女性というよりも少女と言った方が、もしかしたらしくりくるかもしれない。

そんなことを言った日にはどんな怒声がかかるか分かったものではないが。

音を立てないようにゆっくり戸を閉める。

さて、これでこの部屋で活動出来る哺乳類は僕しかない。

これで心置きなく行動出来る。

でもしかし、本当にそんなことをしてしまうのか？

僕は想像する。

こんなことをして穂菜はどんな反応をするだろうか。

喜んでは、くれると思う。

最悪感動のあまり泣いてしまうかもしれない。

うん、これはありそうだ。

だからここは問題にはならないだろう。

問題は僕自身だ。

もしそんなことをして、そんなことをしている間、いつも通り無表情を突き通せるか？

自信はない。

でも気付かれたら終わりだ。

五分悩んだ。

そして出した結論はというと。

「やるだけやるか」

取り敢えず準備をしようということになった。

「穂菜、時間だよ。起きろ。そうしないとキスするよ」

体が揺さぶられ、少しずつ頭が覚醒していく中、そんな声が頭の中に入った。

「んん……、キスなら、してほしいから起きない……」

「じゃあ遠慮なく」

何が？

そう思ったら、唇に何か押しつけられた。
柔らかい。
そして熱い。

ゆっくり目を開くと、夕馬くんの顔がドアップで視界に飛び込んだ。

「ん……………、んんっ!？」

夕馬くんにキスされた、と理解したら頭が一気に活性化していく。
眠気なんて吹き飛んだ。

ゆっくりと顔を離す。

「おはよう穂菜。今五時だよ」

「な、な、なんで!夕馬くんなんで!？」

「キス?それなら穂菜がキスしていいって言ったからだよ」

「ふえ、私？」

少し思い返す。

言った覚えのあるような、ないような……。

多分寝ぼけて言っちゃったんだろう。

夕馬くんがこんなことで嘘つく訳ないし。

「思い出せないけど、いいや」

「いいんだ」

「うん。夕馬くんだからいいの。起こしてくれてありがとう」

私は体を覚ますために背筋を伸ばす。
筋が伸びるのが気持ちいい。

「風呂もう少ししたら入る？湯船は張ってあるけど」

「あ、ん〜ん、もう入っちゃう」

「眠くなって風呂で溺れないですよ」

「大丈夫。誰かさんのお陰で眠気は吹っ飛んじゃったから」

「そう。ならよかった」

布団から出て着替えを持ち、寝室からお風呂場へ向かう。
するとその途中、甘い香りが鼻腔をくすぐった。
これは……栗？

「夕馬くん、栗買ったの？」

振り返って訊ねる。

「栗、ていうかモンブラン。穂菜が寝るとき近くでやすく売ってたから買って来ちゃった。後で一緒に食べよう」

「ホントっ？ありがとう！夕馬くん、今日は早めに〜ご飯食べちゃおうっ！」

私はモンブランを食べたいが為に夕馬くんをお願いする。

「分かったよ。じゃあ四十分くらいかかると思っから、とにかく先に入っちゃいな」

「はい」

私はご機嫌なままお風呂に入る。

第四話 『何か計画を立てているようです』（後書き）

千佳音「お風呂は!？」

穂菜「へ？」

千「入浴シーンはどうしたの、って聞いているのッ!！」

穂「そ、そんなのあるわけないでしょ!！」

千「おかしいじゃん!普通お風呂入るって言ったらその描写書いていろいろあつて夕馬が穂菜ちゃんの裸見ちゃってキヤーキヤー!って風になるじゃん!なんでなんなの!？」

穂「なんでそんなマンガみたいなのが起こると思ってるの!？それから私は別に夕馬くんに見られても叫ばないもん!」

千「……ああ、そうだったね」

穂「な、なんでそこでかわいそうな子を見るような視線を送るの?」

千「いや、なんでもないよ」

穂「それは凄い気になるんですけど……」

千「気にしたら終わりだよ。さて、感想の方いっちゃ行きますか。Collyさん、感想ありがとう!！」

穂「他の皆さんからも感想評価を待ってます。誤字脱字報告もぜひ

ください」

千「はあ。今更だけどさ、どうしてわたしの方が出番の数あったのに穂菜ちゃんが今ここで主人公やってるんだろうね」

穂「主人公の彼女、だから？」

千「あれ？どうしてかな？涙が出てきちゃったな」

穂「ごめんなさい……」

第五話 『年に一度の二人だけの記念日』

六月二日、午前九時、マンション前。

今日は夕馬さんとデート、なんだけど……。

「さて、どこ行こうか？」

全く行き先を決めていない。

と言うのも、決められたところに行くより自由気ままにぶらついておもしろそうなところに行く、というデートスタイルが染み着いてしまったから。

計画を立てて行くって言うのも楽しいけど、行き当たりばったりって言うのも楽しいし。

「ん、そうだね……。夕馬さんこの町完璧？」

「流石に二ヶ月やそこらじゃね。ここから職場に向かう道しか詳しくないかな」

「じゃあ場所はこの町、方向は太陽に向かって行ってみていい？」

考えなしに太陽を指さす。

天気は快晴、絶好のデート日和だ。

まあくもりでも雨でも相手が夕馬さんなら全く問題はないけど。

「太陽か……。あっちは……。ねえ穂菜。ひとつ寄りたいたころがあるんだけど」

「あ、うんっ。いいよ」

じゃあ行こうか、と声を掛けようとしたとき、逆に後ろから声を掛けられた。

「あら、夕馬君に穂菜ちゃん」

振り返れば、お隣の山口さんだった。

年齢は三十路を少し越えた程度で主婦をやっている。

「おはようございます。お仕事ですか？」

山口さんは快斗君と同じ飲食店のパートをやっている。

「そうよ。二人はデート？」

「はい。今日はちょっと特別な日で」

「そう。いいわね若くて。楽しんでらっしゃいちゃラブカップルさん」

山口さんは笑いながら私の脇を通っていった。

因みに？いちゃラブカップル？という称号を私たちにくれたのもこの方。

「山口さんも、いつてらっしゃい」

「いつてきまゝす」

夕馬くんが見送りの言葉を掛けると、山口さんも手を振りながら答えてくれた。

「僕たちも行くのか」

「うん」

私は夕馬くんの腕に抱きつきながら、マンションから出発する。

「あ、ここ」

歩いていると、見慣れたお店があった。

ここはアクセサリーショップで、様々な可愛いものが売っている。

そして私は、そのひとつの商品に目を惹かれる。

「うわぁ〜……」

ここに来るといつもそれを見つめる。

それとは、指輪だ。

ダイヤとかそういう宝石が散りばめられてるものではない。

そこまで高くない、銀色のリングに五つの小さな赤い石
詳しく
ないからよく分からない
が乗せられているもの。

特に理由があるわけではない。
でも何故かこれが無性に可愛く見える。

「それが気に入ったの？」

隣で夕馬くんが聞いてくる。

「うん。なんていうか、これだっ！って感じがするんだ」

視線を指輪に向けたまま答える。

「ごめんね。今日はかって上げられないから、別の日に穂菜が忘れた頃サプライズとして買ってあげるよ」

「ちょっと、夕馬くん？サプライズとか言っちゃったら全然サプライズにならないと思うんだけど？」

「だから穂菜が忘れた頃に渡すんだって。楽しみにしててね」

「そんな風に言われちゃったら忘れられないよっ」

「じゃあそのことを考えられなくなるくらい楽しくしてあげるよ」

「ふふっ。お願いします、夕馬くん」

「お願いされるよ。この店の中に入る？」

「ううん、ここには何度か来たことあるから大丈夫。夕馬くんの行きたいところは？」

「もうすぐそこ。店長がいいカフェあるからって」

「あ、だから朝ご飯ちよつと少な目だったの？」

「うん。イチゴパフェがおすすめなんだって。一緒に食べよ」

「いいよっ」

私たちは50mほど離れたお店に入る。

わんこカフェという看板が立てられていて、そこに二匹のわんちゃんも入っていた。

犬がいるのか犬が好きなのか、そんなことを考えながら店内に入る。

とても綺麗な内装で、シックな雰囲気を醸し出している。広いというわけではないけど、特に狭さは感じられない。中に犬はいなかった。多分後者の方なんだと思う。

「いらっしやいませ。二名様ですね。ではこちらにどうぞ」

ウェイトレスさんが出迎えてくれて、私たちを二人掛け用の席に案内してくれた。

すぐに私はイチゴパフェと、夕馬くんはバナナパフェ、紅茶を二つ頼んだ。

二、三分ほどしてパフェがやってきた。

イチゴもバナナも美味しそうだ。

まずは自分のを一口食べる。

口の中に甘さが広がり、時折イチゴの酸味が姿を現す。
この絶妙なバランスがとてもおいしい。

「おいしい？」

「うんっ、すつごく。はい、夕馬くんあーん」

スプーンでひとすくいすると、それを夕馬くんに向ける。
この味を夕馬くんにも味わって欲しい。

夕馬くんはすぐに開けてくれたので、その中に入れる。

「どう？おいしい？」

「うん、おいしいよ。こっちも食べてみる？」

そっいつて今度は夕馬くんがバナナパフェにスプーンを入れる。

「あゝん」

「あゝん」

何度が咀嚼する。

「どう？」

「すつごくおいしいっ！」

自然と笑みがこぼれる。

「笑ってる穂菜可愛いよ」

突然夕馬くんにはめられた。

私の中では、照れよりも嬉しさの方が率を占めている。

「ありがとう夕馬くん。夕馬くんも笑ってくれと嬉しいんだけどなあ」

そんなことを言えば、

「出来たらね」

と返される。

この問題は私の付き合い始めてからの課題で、楽しみのひとつである。

どうすれば夕馬くんは笑ってくれるのかな、と思いながら、その笑った顔を想像してもだえる。

いつか笑顔にさせようと頑張ります。

「じゃあそろそろ次のところ行こうか」

パフェも食べちゃったので、私たちはこのお店を後にして次のところに向かう。

第五話 『年に一度の二人だけの記念日』（後書き）

穂菜「今日は夕馬くんとデートです」

夕馬「うん、そうだね」

穂「はふふ、まだ一件目だけど凄く楽しいよ」

夕「僕は、楽しいと言うよりドキドキが止まりません」

穂「ゆうまくくん、なんで今更ドキドキなの？夕馬くんまだデート緊張するの？」

夕「いや、デート自体は平気なんだけど、今日は特別だからね」

穂「特別？」

夕「これは伏線なので、皆覚えておくように」

穂「伏線？分かった」

夕「……あ、やっぱりなしで。伏線回収出来る勇気がないです」

穂「ゆ、夕馬くん？なんか今日はいつもと違って変だけど……もしかしてデートつま」

ぎゅっ

夕「つまらなくなってるよ。デートはすごく楽しいよ。それだ

けは絶対。これは僕の問題だから、穂菜は関係、あるって言えばあるけど、僕がすることだから。だから待っててね」

穂「うん。待ってるよ。ずっと……」

千佳音「何この茶番」

快斗「さあ？」

千「もう、じゃあいちゃいちゃカップルのわたしたちが代わりに。Colleyさん、感想ありがとう！これから、よろしく！」

快「なあ千佳音。俺ら、周りから見たら確かにいちゃいちゃしてる方だと思っけどさ、その、なんだ、あの二人見ると本当に俺らいちゃいちゃしてるのが分からなくなるんだけど……」

千「快斗……」

快「なんだ？」

千「あの二人はアブノーマルだから、見ちゃだめ」

快「わ、分かりました……」

第六話 『気障な台詞は人によっては自爆する』

カフェテリアを出た私たちは、少し歩いたデパートに入る。
目的は買い物、ではない。

「夕馬くん、ホッケーやろうっ」

ゲームコーナーだ。

「いいよ」

頷く夕馬くん。

ゲームコーナー、ここは正直侮れない。

少し前までは子供の遊び場と思っていたけど、大人でも
でもって楽しく遊べる。 私たち

実際子供だけじゃなくいい大人も熱中してやっているのも見受けら
れる。

私たちはそれぞれ定位置につき、マレットを手にしてパットが出て
くるのを待つ。

パットが出てきた。

先攻は夕馬くん。

パットを思いっきり叩き、私から見て左の壁にぶつける。
ガンガンと三回跳ね返り、左から私のゴールめがけて滑ってく
る。

かんつと軽く当ててパットを止める。

次は私の番。

夕馬くんとは違って一直線で狙う。

ゴールの右端に狙いを付けて叩く。

しかし狙いはズレてゴールより少し右にぶつかる。

そのまま跳ね返ってこちらに戻ってきた。

それを止めることはせずにもう一度、今度は左壁にぶつけるように叩く。

二回ほど壁にぶつかり、夕馬くんのゴールに入った。

カランカランというパットの音が聞こえた。

「やったあ！先制点っ」

「やられた……。次行くよ」

「よし、次も取る」

そうは息込んだけど、夕馬くんの最初の一撃でゴールを決められてしまった。

「はい、これで同点」

「あうゝ、やられたゝ」

それから接戦が続き、時間切れとなってしまった。

結果は十四対十六。
夕馬くんの勝ちだ。

「ふう、危なかった。これで十一戦七勝四敗だね」

「ああ、今日は勝てると思ったのに。差が開いちゃった……」

「さて、次はどうする？」

「ううう、プリクラ取るのは、どうかな？」

近くにあるプリクラ機を指さして言う。

「いいけど、三週間前に取らなかった？」

「そうだけど、だめ？」

そうお願いすると、頭を撫でられた。

「こんな人前で上目遣いはやめましょう。僕どうにかなりそうだよ」

「え、上目遣い？私そんなのやってないよ？」

さっきの、ただお願いしただけだし。

夕馬くんは？はあ？と大きなため息をついて、頭から手をどけた。

「じゃあ穂菜。早く撮っちゃおうか」

「あ、うん」

ため息の意味を考えてみたけど、特に思い多当たる節は見つからず、なので今はとにかく精一杯夕馬くんといちゃつきながらプリクラを撮った。

思いつきり抱きついたり抱きつかれたり、人が見てないことをいいことに家でやるようなことをいっぱいやった。

決してエッチなことは一切やってません！！

プリクラも撮り終わり、少しおなかも空いてきたのでフードコートに足を運ばせ、ファーストフードを食べた。

いつもお昼は夕馬くんが作ってくれるお弁当なので、こういうのも新鮮だ。

ハンバーガーをぱくりと一口。

こんなに安くて美味しいのはホント凄いと思う。

「ほら穂菜、子供じゃないんだからケチャップ周りに付けないの」

そう言った夕馬くんは私の口元に手を伸ばし、付いたケチャップを親指で拭くとそれを舐めた。

そんな行為が無性に恥ずかしくなって、顔を赤くして足をばたばたさせる。

こういう不意打ちは卑怯だと思う。

これならキスの方がましだ。

「ねえ穂菜」

「な、な、何？」

「穂菜の唇、凄く柔らかいよ」

極めつけはこれだ。

もう我慢できなかった。

でも理性を総動員させてテーブルに伏せるといふ行為で留まらせた。

「どうしたの穂菜？ハンバーガー食べないの？早く恥ずかしがって顔見せて」

確信犯だ。

いや夕馬くんの場合、確信犯じゃない行動の方が少ない。

ちよつとだけ反抗したくなったので足で夕馬くんを蹴る。

「穂菜痛いよ。反抗期？僕のこと嫌いになった？」

むしろ悪化してしまった。

言わないとだめか。

夕馬くんSだからな。

あ、私はMじゃないからね。

こういう辱めを受けてほんとは嫌なんだからねっ。

……まあ夕馬くんなら許せるけど。

「……大好きだよ」

「ホントに？」

「本当だよお」

「じゃあその可愛いお顔を見せておくれ」

どうして年寄り口調？

そう思ったけど、まあいつもの気まぐれだと思って気にしないことにした。

まだ赤い顔を少しあげると、目の前にポテトが一本差し出されていた。

小さく口を開けてそれをむしゃむしゃ食べる。

「穂菜」

「ん？」

むしゃむしゃ。

「穂菜を見てるとさ」

むしゃむしゃ。

「なんか小動物を飼いたくなってくるんだけど。特にリス」

ごっくん。

「それは物凄く言葉を返しづらんだけど、現実的に言っちゃうとマンションペット禁止だよ」

「ホントに現実的だね。だから、穂菜が僕のリスになってくれないかな？」

「.....」

「.....」

「.....」

「穂菜」

「何？」

「今の僕はおかしかった。一言一句全て忘れて」

「うん。ごめん無理。もう記憶しちゃった。でも意外だったな、夕馬くんがそんな台詞言うなんて」

「ニヤニヤが止まらない。」

「言い訳させて」

「いいよ」

「穂菜にもっと恥ずかしい顔をしてもらおうと思ったの。そしてキザだったらしい言葉を選んでみたんだけど.....」

「なれない台詞で自爆しちゃったんだ」

「穂菜、お願いだから忘れて」

「『だから、穂菜が僕のリスになってくれないかな？』って言葉？」

「……穂菜僕のこと嫌い？」

「大好きだよ。そんな慣れない気障な台詞を言うところも含めて」

「じゃあ分かった。覚えてていい。誰にも言わないで。僕に出来ることなら何でもするから」

「そんな夕馬くん。夕馬くんは何をしてもらおうとか、そんなこと考えてないよ。誰にも言わないよ」

「穂菜……」

「あ、いまいい小説のアイディアが浮かんだ」

「穂菜、さようなら。僕天国でずっと穂菜のこと見守ってるから。今までありがとう。来世で、また会えたらいいね」

そう言つて夕馬くんは立ち上が

「い、いやー！夕馬くんホントごめんなさい！！絶対誰にも言わないし、小説にも書かないからっ！だから死んじゃだめっ！」

「本当に誰にも言わない？」

「言わない言わない！絶対快斗君にも言わないっ！」

「約束だからね」

「うん、約束つ。本当にごめんなさいつ。ほんの出来心なの！夕馬くん打たれ弱いつて知らなくて」

「うんまあ、僕のせいなんだけどね。じゃあ早く食べちゃおうか」

「うん」

私たちは昼食を食べ終え、その後いろいろ買い物をして、楽しくデザートを終えた。

第六話 『気障な台詞は人によっては自爆する』（後書き）

穂菜「これでデートは終わりです」

千佳音「今更だけどさ、後書きってどういう理屈で私たちを出して
るの？コンビめちゃくちゃじゃない？私夕馬と組んでないし、穂菜
快斗と組んでないでしょ？それに夕馬と快斗も組んでないし」

穂「適当なんじゃないかな？」

千「やっぱり？」

穂「ところで」

千「ん？」

穂「作者も今気がついたらしいんだけど、結局快斗君と千佳音ちゃん
の職業言ってなかったよね」

千「い、言わなくていいの！せっかく作者もごまかしたんだから！
！」

穂「快斗君は飲食店の正社員、千佳音ちゃんはニートです」

千「いやああああっ！言っちゃった！！この子さっさと言っちゃ
った！！」

穂「どうも千佳音ちゃんは、快斗君がいっぱい稼ぐからまだ働かな
くていいと考えてるらしいです。パートくらいはしようよ」

千「いや。穂菜がいじめる……」

穂「現実を突きつけたただけなんだけどな……」

千「それがいじめなの!!」

穂「千佳音ちゃんほんと大丈夫なのかな……? あ、そう言えば作者が、『次話夕馬がかっこいいか今回みたいに自爆で恥ずかしい人になるか是非判断して教えてください』という言葉を残したんだけど……夕馬くん何するんだろう? まあそれも楽しみてことで。ではみなさん、感想評価待ってます」

千「働きたくないわけじゃないんだもん……」

第七話 『貴女へのサプライズをしたかったのに』

六時二十二分。

デートが終わり、私たちは家に戻った。

「うわーい、我が家だー」

「そんな何日も空けた訳じゃないんだから。それにここアパートだから我が家って言うのはちよつと」

「ううう、夕馬くんのいぢわるー」

ほっぺを膨らませて拗ねてみる。

そしたら夕馬くんにはっぺをつつかれた。

「穂菜どうしたの？そんなマンガみたいなことして」

「ちよつとやってみたくなっちゃって。それに夕馬くんに、可愛いつて、言ってもらえるかなーって」

言つてて少し恥ずかしくなってきた。

そんな私に夕馬くんは頭を撫でてきた。

「そつか、気付かなくてごめんね。というより穂菜は何してても可愛いから、その都度言つてたらきりがないよ」

「でも、でもねっ、やっぱり意識的にやったときは言われないなあ

って……」

「そっだよ。穂菜、可愛いよ。また気が向いたら見せてね」

「うんっ」

荷物を置き、リビングのソファに座る。

「どうしよっか？風呂はまだ用意してないし、夕食もちっと早いし」

「夕馬くん、私先にシャワー浴びていいかな？」

「シャワーだけで平気？」

「うん。あ、夕馬くんも一緒に入る？」

「からかうように聞いてみた。」

「嬉しい申し出だけど、ご飯作っちゃわないと。炒飯でいいかな？」

「いいよ。というより夕馬くんが作るものに口出しはしません。じやあお風呂行ってきます」

着替えを持ってお風呂場に入る。

「ふわ〜、さっぱりしたあ」

「穂菜、もう準備できたよ」

夕馬くんに言われてテーブルを見ると、確かに料理が出来上がっていた。

「うわあ、美味しそう」

「ありがとう。じゃあ食べよう」

「うん」

席について、いただきますの言葉と共に端を動かす。

やっぱり夕馬くんの料理はおいしい。

パラパラ炒飯を租借していると、ひとつ小さな疑問があった。

「夕馬くん、今日いつもよりちょっと量少な目だね。そろそろ材料なくなってきた？」

「あ、違うよ。材料はあるけど、今日はちょっとデザート作ったから」

「ほんとっ？」

それを聞いて俄然食欲がわいた。

炒飯やおかずを一気に平らげる。

「デザートっ、デザートっ、デザートっ」

「穂菜、そんなに早く食べてくれるのは嬉しいけど、ちゃんと噛まないでだめだよ」

「大丈夫っ。高速で噛んだからっ！」

子供みたいな言い訳をしてると、夕馬くんがキッチンにデザートを取りに行ってくれた。

ほんの少しの時間が待ち遠しい。

夕馬くんが持ってきたのは、小さなホールケーキだった。

「え、夕馬くんそれ作ったのっ？」

「うん。今までは作ってなかったけどさ、やっぱり今日は特別でしょ？ 本当のパーティーは三日後だけだし、まあフライングってことでいいかな？」

「う、うんっ！ 全然いいよっ！ はあ、夕馬くんの手作りケーキかあ。どんな味がするんだろうっ？」

中心にケーキを置き、夕馬くんが配ってくれたフォークを手にする。

夕馬くんは包丁を手に持ち、ケーキ入刀をする　　かと思いきや止まった。

「え、夕馬くん？」

「……ごめん。やっぱりこのケーキなしで」

そう言つと夕馬くんは席を立てケーキをキッチンの方へ運んでいく。

「え……？あ、ちょっと、夕馬くんっ!？」

私も慌てて立ち上がって後を追う。

あんなおいしそうなケーキのどこが駄目なんだろう？

そんな考え事をしていたためか、足下にある荷物に蹴躓いてしまった。

夕馬くんを巻き込んで。

「きゃあっ!？」

「え、穂おっ!？」

どっしやーん。

夕馬くんが下敷きになったのであまり痛くなかった。

胸に埋くめていた顔を上げて、夕馬くんの安否を確認する。

「夕馬くん大丈夫」

先の言葉が言えなかった。

何故なら、夕馬くんの顔の上にケーキが乗っていたから。

我に返ると、急いでケーキをどけようとした。
しかしその前に夕馬くんが、ケーキの上に腕を乗せてしまった。

「チツ、最低だよ……」

そんな夕馬くんの、憎々しげな感情が入った久しぶりの言葉を聞いた。

「い、ごめんなさ　」

「穂菜じゃないよ。僕自身に言ったの。穂菜のせいじゃない。ごめんね、最後の最後で僕が変なことして。今日大事な日にひどいことしちゃった」

夕馬くんの左手がそつと上に伸びる。

その手を掴み、私の頬に寄せた。

「ごめんね穂菜。本当にごめん。最後に訳分らないことして」

もしかしたら夕馬くんは泣いてるのかもしれない。

夕馬くんはぐつと右腕に力を入れて顔に押しつける。

そのとき、ケーキの端から何かが飛び出てきた。

なんだろうと手を伸ばしてみると、ジップロックの付いた小さな袋だった。

どうしてこんなのがケーキの中に？

それを取り出し周りのケーキを取り除くと、何か入っていた。

指輪と、折り置まれた紙。

「え？」

私は袋を開け、中身を取り出す。

その指輪には、見覚えがある。

これは今日のデートの一番最初に見た、私が妙に気に入った指輪だった。

夕馬さんに答えが聞きたくて、顔の上のケーキを退けた。

「夕馬くんっ！これどうしたことっ！？」

「……偶然ね、二週間前に穂菜があのお店で立ち止まっていたのを見たんだ。声掛けようかなって思ったんだけど、穂菜すごい嬉しそうな顔しててさ、つい見惚れちゃって。だからそれをこっそり買って、今日のためのプレゼントにしようって思ったんだ。言っただしょ？ サプライズしてあげるって。ケーキの中に入れて、それを穂菜に食べさせて、ってやつ」

「で、でも、どうしてやめようとしたの？」

「……………肝心なのは紙の方でね」

「紙？」

私は折り置まれた紙をゆっくり開く。

「すごい迷ったんだ。書くかどうか。それで試しに書いてみたんだけど、やっぱり恥ずかしくなって……」

紙を開ききると、そこには見慣れた夕馬くんの字でこう書かれていた。

『結婚してください』

「　　っ！！」

私は口元を手で抑える。

「穂菜、好きだよ。こんな、最後の最後でヘマするような僕でよかったら、結婚してください」

「ゆ、ゆうまくん……」

嬉しさのあまり涙声になりながら、私は前に倒れて両肘で体を支える。

「夕馬くん、夕馬くん、夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん夕馬くん！夕馬くん！」

――

何度も、何度も夕馬くんの名前を呼ぶ。

「夕馬くん！夕馬くんっ！好き！好きっ！大好き！夕馬くんのこと大好きっ！」

「僕も大好きだ」

「夕馬くんが思ってる以上に、私夕馬くんのこと大好きっ！！」

「僕も穂菜が思ってる以上に、穂菜のことが大好きだ」

「夕馬くん、私と、結婚してください」

「こちらこそ、お願いします」

私たちは、自然にキスを交わした。

顔にケーキが付くのなんて気にしない。

お互いの好きを確認しあうように、長い口付けをする。

バン！！

「穂菜ちゃん大丈夫！？無理やり押し倒されたりしてない！？」

「だからお前、夕馬がそんなことするわけ……」

突然の闖入者が現れた。

「あ、あれ？ま、まさか穂菜ちゃんが押し倒してた？」

「これは俺も予想外すぎる展開……てか夕馬の顔に付いてるのって、クリーム？」

「ま、まさか女体盛りならぬ男体盛り！？ほ、穂菜ちゃんやるわね……」

「……………」

私と夕馬くんは言葉を交わさずに意志疎通をした。

ゆつくりと夕馬くんの上から退く。

「あ、私たち退散するから続けてもいいよ」

「気にするな気にするな。でかい音聞こえたから来てみただけだから。悪いな邪魔して」

ゆらつと立ち上がる夕馬くん。

「……………てめえら」

「え、あの……夕馬くん？」

「ど、どうした？」

「どうした、だと？てめえら空気読めやコラ。何してくれてんだよ？僕、今相当にキレてるんだ。もう今までで最高に」

「ヒ、ヒイイイツ！？」

「一遍、死んでみる？」

「いやああああああああっ！！！！」

第七話 『貴女へのサプライズをしたかったのに』（後書き）

穂菜「夕馬くんっ！」

夕馬「穂菜、本当にごめんね。ちゃんと出来なくて」

穂「そ、そんなことないよっ！凄いいサプライズで、本当に、本当に……ひくっ、嬉しくて……ぐすっ。っああ、涙が止まらないよぉ」

夕「ありがとう穂菜。読者のみなさん、僕のプロポーズはどうでしたか？いや、あんなのプロポーズとはいえないか」

穂「ううん、夕馬くんのプロポーズ、凄いい嬉しかったよっ」

夕「そう言ってもらえるなら、僕も嬉しいよ。皆さん、七話まで読んでくれてありがとうございます。あ、これで終わりというわけじゃないですからね。もうちょっとだけ続きます。感想や評価をくれたら嬉しいです。ほら穂菜」

穂「うん……。皆さん、これからもかつこいい夕馬くんの活躍を見てください」

夕「……穂菜、なんかそれだと、僕が言わせたような感じがしない？」

穂「え？そんなことないと思うよ？それに私の言ったこと事実だし」
夕「穂菜……ここは素直に賞賛として受け取っておくとして、次回もよろしく願います」

穂「よろしくお願いします」

第八話 『こんなあつさりすぎて、本当にいいんですか?』

「さて、プロポーズはしたはいいけど、やっぱりご両親に会わなきゃ駄目だよな?」

夕馬くんとケーキ騒動が終わって次の日の朝、朝ご飯の時にそう言ってきた。

確かに夕馬くんの言う通り挨拶は行かなきゃならない。
でもうちの場合は……

「私のところは、行かなくてもOK出してくれるよ?もう親公認だし」

「うん。それは僕んところも同じだけど、許可とかじゃなくて伝えるべきだね」

「ああ、夕馬くんの言いたいことは分かってるよ。でも、いつ行くか?夕馬くん当分お休みないでしょ?」

「よくご存じで。でも夜は平気だから、穂菜が疲れてなければその時に行こうかなって」

「あゝ、私次第かゝ。頑張ります。それで、時間帯はよしとして、日にちは?」

んゝ、とうなり声をあげながら考える夕馬くん。

「今日、とか?」

「早っ!？」

プロポーズして次の日に報告なんて早すぎると思う。
他の人はどうだか分からないけど。

「いや、これにはいろいろと僕の中で理由があつてね」

夕馬くんはそう前置きをしてから喋り始めた。

「穂菜さ、婚姻届とか考えてる？」

「こ、婚姻届……」

その言葉で改めて夕馬くんと結婚するんだと言つことを認識する。

「と、特には……」

「無理ならいいんだけどさ、やっぱりそういつのってなんらかの記念日に届けたいなつて思つてるの」

「記念、日?……あ」

そこまで言われたらさすがの私も気付く。

この先一番近い記念日と言えば、明後日の初デート記念日。

「夕馬くん、それって明後日のことだよね?そういつのってすぐ出来るものかな?」

「詳しくは分からないけどさ、でも、早めの方がいいでしょ?」

「私は構わないよ」

「じゃあ穂菜、今日の夜……どっちから行こうか？」

「ううん、こついうのってイメージだけど女のところから行くよね？」

「それは分からなくはないよ。じゃあ理名さんの方からってことで
ごちそうさま」

パンツと手を叩く夕馬くん。

それを見て私も残りを頼張ってごちそうさまを言う。

夕馬くんは食器を渡し、空いたテーブルの上にノートパソコンを開く。

「よし、今日も頑張ろう」

意気込みを入れて、文字を打ち出す。

夜。

私と夕馬くんは今私の家の前に立っている。

「どうしよう。自分の家なのに緊張してきた……」

周りの人にも聞こえるんじゃないかと言つほどに心臓が高鳴る。

「僕も同じ。ここで駄目だ、なんて言われたらどうしよう」

「と、とにかく、入っちゃおう」

事前に私たちが来るというのを伝えておいたので、中にはいるはずだ。

私を先頭に、自分の敷地内に入り、扉を開く。

「た、ただいま」

「お邪魔します」

出迎えてくれたのはお母さんだった。

「あ、穂菜、夕馬君。お帰りなさい。はい上がって上がって」

「さり気なく僕に？お帰り？と言ってるんですが」

「気にしない気にしない。それで今日は何？夕馬君が穂菜のこと嫁にもらってくれるの？」

なんで一発で分かったんだろう。

私まだ？今日帰るね？としか言っていないのに。

「はい。穂菜を嫁にもらいに来ました。お義母さん、娘さんを僕にください」

なんということだろう、殆ど出会い頭で、しかも玄関で娘をくださないなんて、ムードなんてあったものじゃない。
まあらしいと言ったららしいんだけど。

「もう夕馬！どうして今それを言うの！？遅すぎよ！あんたたち付き合って何年経ってると思ってるの！？私は早く孫の顔見たいんだからねっ！」

対するお母様は、何故か既に夕馬くんのお母さん気取りでいる。
確かに義理の母親にはなるんだけどさ。

「ていうかお母さん、そろそろ家に上がっていい？いくらなんでも玄関にいつぱなしっていうのはどうかと思うよ。お父さんにも言わなきゃだし」

「まあそうね。お父さん！穂菜と夕馬が結婚するって〜！」

「おおそうか。今日はめでたいな」

軽っ！？

二人の対応がめちゃくちゃ軽いよ！？
こんなのでいいの！？

確かに嬉しいけどさあ！！

「穂菜、こういうのでいいのかな？」

隣で夕馬君もあきれ気味に聞いてきた。

ある程度は親の反応を予想していたとはいえ、ここまであっさりとは思わなかった。

「さあ上がって上がって。ご飯はもう食べたのよね？」

「あ、うん……」

「というか、もう用事は済んじゃったんですけど……」

「気にしない気にしない。それより、どんな風にプロポーズしたのか、しっかりのろけてもらうからね。覚悟しなさい」

そう言ってお母さんは半ば無理矢理私たちを部屋に引きずりこみ、いろんなことを聞かれた。

そして私たちは私の部屋で一緒に泊まった。

第八話 『こんなあつさりすぎて、本当にいいんですか?』（後書き）

穂菜「第八話です」

夕馬「あと残り二話だって。早いね」

穂「うん。一ヶ月もしないうちに完結しちゃうなんて」

夕「そうだね。そういえばまだ二十日ぐらいしか経ってないんだね」

穂「短いな」

夕「まあしょうがないよ。取り敢えず穂菜と結婚できることを喜ぼう」

穂「そうだね」

夕「さて、感想の謝辞でも。K i i t iさん、感想ありがとうございます。k i i t iさんからはベストカップル賞というのを僕たちにくださいました。嬉しい限りです。繰り返しますが、ありがとうございます」

穂「ん、終わっちゃったね」

夕「そうだね。じゃあ次回予告でもやっちゃおうか」

穂「え、そんなことして平気なの?」

夕「今回はね。今回は、僕の両親に会ってきます。そして僕と穂菜、

快斗と千佳音の四人でパーティをします」

穂「えっと、楽しみにしてください。感想や評価は是非とも待っています」

第九話 『恋人同士なのに、脅迫してる?』

翌日の夕方。

今度は夕馬くんのご両親に会いに行く。

「ただいま」

「お邪魔します」

夕馬くんの家に入れば、夕馬くんのお父さんである九那^{くなた}柁さんが出迎えてくれた。

「お、穂菜ちゃんいらっしやい。相変わらず可愛いね」

「ありがとうございます」

「で、今日は何?」

「お母さんもいる?」

「いるぞ」

「じゃあ二人に話」

「はいよ」

九那柁さんに連れられてリビングに入る。

「おい、夕馬と穂菜ちゃんが来たぞ」

九那柁さんが中にいる夕馬くんのお母さん、めくみ萌未さんに声をかける。

「あらいらっしやい。夕馬、ご飯は食べた？」

「ただだけど、どうしようか悩んでる。でもその前に話をしておこうかと」

家にいる全員が席に着く。

「なんの話？」

萌未さんが聞く。

「僕たち結婚します」

「……………」

二人はしばらく黙った。

この沈黙は怖かった。

うちの両親ほどではなくても、もっと早く答えがもらえると思っていたからだ。

二十秒ほどたっただろうか。

「はあ」「」

二人は深いため息をついた。

「あ、あの、もしかして、私じゃだめ、でしょうか……?」

ううう、それなりに夕馬くんのご両親とは仲良くやってたと思ってたのに……

だんだん気持ちが落ち込んでいく。

「あ、違っの穂菜ちゃん、落ち込まないでっ」

萌未さんが慰めてくれた。

「二人は理名さんのところにはもうご挨拶した?」

「したよ。成り行きで玄関で」

「玄関で、まあ種原家らしいな」

九那柁さんが苦笑しながら言う。

私の家族と夕馬くんの家族は、私たちが付き合いだしてしばらくした後、顔を合わせ、仲良くなった。

「で、何か言われなかったか?」

「……………結婚するの遅いつて言われた」

「やっぱりな。俺たちのため息もそれだ。遅い、遅すぎる!俺たちが何年待ったと思ってるんだ!?夕馬が結婚できるのは十八だから四年だぞ!四年間何やってたんだ!?もっと早く結婚しろよ!」

「そうよ！今の今まで新婚張りにイチャイチャしてるのになかなか結婚しないで、お母さん心配してたんだからねっ！」

「あ、あの、お言葉ですけど、私たちつい三ヶ月前まで学生だったんですけど……」

「学生が何！？愛があれば立場なんて関係ないのよっ！」

「いやいろいろめんどくさいでしょ。てか結婚遅いとか二人には言われたくない。二人、六人の中じゃ一番最後でしょ？確か二十五、だっけ？」

「六人って？」

私は分からず訊ねる。

「僕と快斗と千佳音のご両親。因みに快斗たちは大学行かずに二十、千佳音たちは大学在学中に二十二」

「ちょっと待ちなさい夕馬。なんで夕馬が私たちの結婚した歳知ってるの？お父さん言ったの？」

「言ってねえよ。誰がお前との約束破るか」

「よね。さあ夕馬、早く教えて」

「都鞠さん。ああ、都鞠さんは快斗のお母さんね」

分からない私に教えてくれた。

「やっぱり都鞠か……。いつちよ説教してこようか」

「うん、そうだね」

「ちよつと話逸らさないでよ。結局、二人より早く結婚する僕たちのことを遅いだなんだ言うのはやめてくれる？」

「ううう、夕馬がいじめる。昔は可愛くて、『ぼくめぐみちゃんのおよめさんになるね』とか言ってくれたのに」

「穂菜、僕この家と縁を切るよ。そして、種原夕馬と名乗ることにする。さ、いつまでも他人の九那柁さんと萌未さんのところにいたらお邪魔だから、早く帰ろう。ではお二人とも、さようなら」

夕馬くんは私の腕を優しく掴むと、本当に出て行ってしまった。後ろから聞こえる、『ゆ、夕馬！？ちよつと待って！ごめん、私が悪かったから戻ってきて！』と言う台詞はガン無視のようだ。

「穂菜」

しばらく歩いたところで、夕馬くんが私の名前を呼ぶ。

「何？」

「絶対他言無用、または忘却だからね」

「え？……あ、めぐみちゃんのおよめさんに」

ガシッと肩を掴まれる。

「いい？絶対誰にも言っちゃだめだよ？むしろ忘れて。そうしないと僕は今の今まで別に知ろうとは思わなかったけど付き合うんだったらこれを覚えておきなさいと理名さんから言われた穂菜の恥ずかしエピソードを全部口にしてしまうかもしれないんだ。しかもしかも僕は一酸化中毒死をしてしまうかもしれない。お願いだから絶対言わないでね」

淡々と夕馬くんはしゃべっていく。

無表情で迫られてるので物凄く怖い。

そして何が一番怖いかというと。

「あの、夕馬くん、わ、私の恥ずかしエピソードって？」

小さい声で聞くために夕馬くんの口元に耳を近づける。

「.....」

「ダメッ!!」

夕馬くんの話を聞いて、思わず叫んでしまった。

今の私は恐らく顔が真っ赤なのだろう。
物凄く熱い。

今度は私が夕馬くんの肩を掴む。

「夕馬くんお願い！ほんつとくに！本当にそれだけは言わないで！お願いだからっ！！なんでもするから！！最悪浮気も許すよ！？だからほんつとっ」とに言わないでッ！！」

私は必死に叫ぶ。

それほどまでに私にとっては黒歴史なのだ。

「じゃあ穂菜、僕のこと本当に言っちゃだめだからね」

「言わない！本当に言わない！夕馬くんも言わないよね！？」

「言わないよ。秘密にしてあげる」

「よ、よかった」

私は完全に気が抜けてしまい、夕馬くんにもたれかかる。

「……夕馬くん」

「何？」

「安心しすぎて腰抜けた……」

「……帰る？それとも外で何か食べる？近くにあるよ？」

「は、早く座りたいから、外で食べる」

「じゃあ決定」

夕馬くんの肩を借り、私たちは近くのレストランで食事をした。

第九話 『恋人同士なのに、脅迫してる?』（後書き）

千佳音「さて、今回の下手人はどいつだ？」

快斗「へいお頭。名前は畑山香樹、通称作者と呼ばれているやつで
ございます」

千「ほう、作者か。つれて参れ」

快「ははあ」

作者「……………何この三文芝居？」

千「黙れ。貴様はそのような口が利ける人間か!？」

作「あ、い、いえ…………」

千「まずは自分の犯した罪状を言え」

作「……………『その想いは変わりますか?』第六話の本文を、
操作ミスで消してしまいました」

千「その通りだ。貴様は何をやっている？」

作「すみません…………。今、記憶を頼りに頑張って執筆しています」

千「そんなものは当たり前だ!全く、『その想いは変わりますか?』
の元になっている『四人の魔法使い』（百話到達おめでとう。千佳
音ちゃんも応援してるよ。皆もぜひ呼んでね。只今アンケート中だ

よ。参加してくれるとうれしいな）にうつつをぬかしているから」
んなことになるんだ！」

快「お頭、物凄い宣伝が入っています」

千「貴様は黙ってる！で、いつになったら書き終わるんだ？」

作「きよ、今日中にはなんとか……」

千「ではさつさと取りかかれ！」

作「は、はいっ……！」

千「では次の者！」

快「なあ千佳音、もうやめないか？今更だけどさ、？お頭？つて賊とか棟梁とかのトップのことじゃん。絶対罪を裁く人がお頭な訳ないじゃん。設定があやふやだろ」

千「うわーんっ！かいとがいぢめるーひどいひどい！かいとのばかあ！いいじゃんいいじゃんっ！」

快「……………」

千「え、ちょっと、快斗？さすがに無視は厳しいよ？突っ込んでよ。せめて冷たい声でいいから何か言つてよ。ほんとに泣くよ？」

快「いや、今の、可愛いな〜と思って……」

千「ふえっ？え、え、あの、快斗君？あの、そんな……マジ？」

快「マジ」

千「う、あああああああああああつ！！あああつ！恥ずかしいっ！！もう快斗っ！嬉しすぎてもう恥ずかしいよ！！何急に！わたしアドリブ弱い知ってるでしょ！？」

快「いや、お前十分アドリブは強い方だと思うぞ？」

千「うるさいっ。もう恥ずかしすぎるから帰るっ！！じゃあねっ！快斗ありがとう愛してる！！」

快「じゃあねって……俺も同じ家なんだけどな……」

第十話 『これから先、どんなことがあっても幸せです』

六月五日、今日はどうやら夕馬くんも無理して休みをとってくれたらしい。

なので朝に役所に言っただけ婚姻届をもらいに行き、快斗君と千佳音ちゃんに承認になってもらった。

そしてこの時物凄く悩んだことがあった。

「名前どうしようか」

夕馬くんが呟く。

少し前までは？樋口？という名字でいい、となっていたんだけど、

「……夕馬くん、本当に萌未さんたちと縁切りしたいの？」

苦笑しながら聞いてみた。

「本気と書いてマジだよ。真剣に種原と名乗ろうとしてる」

昨日過去の歴史をほじくり返されて相当お怒りらしい。

気持ちには分かってはくれないけど。

「縁切るときって書類とかいるのかな？いるんだろうな。戸籍から変えたいわけだから」

意味的だけじゃなく法的にも縁を切りたらしい。

これはボケで終わる様な感じがしない。

「ゆ、夕馬くん。私、樋口穂菜って名乗ってみたいな、とか思ってるんだけど……」

希望を小さくしながら要求を出してみる。

こんな弱い理由じゃだめだから他に理由を考える。

「分かった。じゃあ樋口で行くね」

「ええっ！？早っ！！」

「……穂菜、一応マンションだから大声は出さないでね」

「あ、ごめん」

「それから、そんな真剣に考えようとしないでほしくても穂菜が言うならその通りにするよ。穂菜がどうでもいいって言ったときだけ、僕は種原を選ぶよ」

「夕馬くん……。えっと、私は縁切らないでほしいな九那柁さんにはいろいろよくしてくれてるし」

「穂菜、あの男はロリコンなんだ。昔二人が付き合ってた写真をみたんだけど、あの男十七歳なのにあの女はどう見ても十三歳だった。だから油断しないで。あの女の目がなくなったら絶対抱きついたりしてくるから」

「夕馬くん、せめて名前で呼んであげよーよ」

「………くなたさまには気をつけてね」

かなり嫌そうに名前を呼ぶ。

だんだん空気が悪くなってきたので慌てて話を返る。

「あ、あのさ！じゃあやっぱり夕馬くんって九那柁さんの血を引いてるんだねっ！」

言ってかなり空気が悪くなることに気づいた。
思い返しても私が悪いのは明白だ。

「どこが？」

ドスの利いた声で返してくる。

私は私でテンパって続きを言ってしまう。

「だ、だって、あのころの私かなり幼くて、そのころ夕馬くんが告白してきたわけだから夕馬くんも小さい子が好きなんだと、そういう……」

「穂菜」

夕馬くんは私の名前を呼ぶと一枚の紙を取り出した。

「離婚しよう」

「ちょっと待ってえっ！！どうして！？結婚もしてないのに離婚！？そしてなんで離婚届を持ってるの！？最初から離婚する気満々！？」

「これは種原家からご拝借を」

「ちょっと待って」

今とんでもないことを聞いた。

「種原家？種原家って何？種原仗、理名夫妻のこと？」

「そうだよ」

「なんで二人がそんなもの持ってたの？」

「……あの二人ね、婚姻届を貰おうとしたときテンパって離婚届くださいって言っちゃったんだって」

「ぷっ！」

「それを家に着いたときに気づいて、でも行ったその日に婚姻届もらうのもかなり恥ずかしいからと言うことでほとぼりが冷めるまで待ってもらいに行ったんだけど、その間に離婚届の存在を忘れ、最近掃除をして見つけたらしくて、そういう書類を見てみたいって言ったら貰った。一週間くらい前かな」

「そ、そんな面白エピソードがあったんだ……。もっと早く聞いてればよかった」

「安心して穂菜。これは婚姻届だよ」

夕馬くんはひらひらと婚姻届を揺らす。

「ねえ夕馬くん、ごめんね変なこと言っちゃって。私、本当に？樋口穂菜？って名乗りたいの。こたわりがあるってわけじゃないんだけど、私が夕馬くんの家族になりたいから、？樋口穂菜？っていう名前に変えたい」

明確に自分の気持ちを伝える。

すると夕馬くんはボールペンを動かしながら言う。

「分かった。穂菜の言う通り、名字は樋口、僕は縁を切らない。それでいい？」

「夕馬くん、怒ってない？」

「怒ってないよ」

そう言っでどんどん必要事項を書いていき、印鑑を取り出して捺印する。

「じゃ、穂菜も押して」

夕馬くんに紙を差し出され、慌てて印鑑を取り出して捺印する。

これで書くべきところは全て埋まる。

「よし、少し休憩したら出しに行こっか」

「うんっ！」

「第7回！祝、夕馬と穂菜ちゃん初チュウ記念日&」

「第1回夕馬と穂菜結婚記念日に」

「『『『かんぱい！』『』『』』」

その日の夜、私と夕馬くん、快斗君と千佳音ちゃんの四人でビールの入ったグラスをぶつける。

会場は私たちの部屋。

テーブルには豪華な料理で埋まっている。

「ぶは〜！やつぱビールは最高だねえ！」

千佳音ちゃんは一気に飲み干し、再び自分でビールを注ぐ。

「千佳音ちゃん、もうオッサンみたいだよ」

「実際オッサンでしょう。いろんなこと快斗に任せっぱなしで、いつもごろごろしてるんですよ？」

「いや、流石にそれは悪いと思って家事の一通りはやってるわ」

「結構綺麗にしてくれてるぞ」

「いや、金稼いでなくて養ってもらってるんだから当然でしょ」

「そんなことないってば。わたしは言わば家政婦。快斗からお金を取らない代わりにご飯と住み場所を提供してもらってるの」

「物は言いようだね」

「でも快斗君としては結構楽なんじゃない？帰ったら何もなくて」

「まあな。専業主婦ってやつか。助かってるよ」

「それに比べてうちの嫁は……はあ」

「ゆ、夕馬くん！なんでため息つくの！？そりゃあ料理は出来ないけど……でも掃除くらいはしてるよっ！」

ご飯を食べながら談笑していると、不意に快斗君がしみじみと呟いた。

「それにしてもさ、俺らしい具合に収まったよな」

「いい具合って？」

千佳音ちゃんが聞き返すと、それに夕馬くんが答える。

「僕たちの関係のことでしょ。高校、ていうか中学の頃は三角関係じゃなくて四角関係だったんだし」

「四角？……あ、ほんとだっ！」

私は驚くようにして声を上げた。
確かに昔は、夕馬くんは私のことが好きで、私は快斗君のことが好

きで、快斗君は千佳音ちゃんが好きで、千佳音ちゃんは夕馬くんが好きで。

今思えば凄い人物関係だったんだな。

「一番最初にその関係ぶちこわしたのって、穂菜ちゃんになるのかな？」

「私、なのかな？快斗君あきらめたから」

「いや、それ言うなら俺じゃね？俺が千佳音諦めて沙鳥に行ったんだから」

「あゝ、そうだね。高一のはじめだっけ？快斗が沙鳥に告白したのって」

「そうそう。見事に玉砕。で、千佳音とゴールイン。千佳音ごめんな、なんか二番目みたいな風になって」

「いいよ。気にしてないし。今も幸せですから」

そう言っただけ千佳音ちゃんにはビールを何度目になるか、一気に飲み干す。

「ぶはあ！ねえ夕馬」

「何？」

「わたし夕馬好き。結婚しよう」

「いいよ」

「ちょっと待って！婚姻届出してすぐ浮気！？流石にそれはないんじゃないのかな！？」

絶対千佳音ちゃん酔ってる。

夕馬くんは……分かってて乗ってるのかな。

「じゃあ俺ら結婚しよっか」

すると今度は快斗君がからかうように言ってきた。
多分素面。

「だあめ。快斗はわたしの！夕馬もわたしの。じゃあ逆ハーレムだ！二人よ、どんとわたしを愛しなさい！胸は穂菜ちゃんより大きいから気持ちいいよっ！」

どんつと自分の胸を叩く千佳音ちゃん。

「千佳音ちゃん、下ネタはやめようよ。一応お祝い事なんだし」

「ほうほう、つまり穂菜ちゃんは嫉妬なんだね？自分のおっぱいじや挟んだりしごいたり出来ないから」

「ちょ、千佳音ちゃん！！」

今のは言い過ぎだ。

「私だってそのくらい出来るもんっ！！」

「そろそろやめなさい」「」

べちつと夕馬くと快斗君が私たちの頭をそれぞれ叩いた。

「快斗ー！何すんだあ！？わたしじゃだめって言うのか！？ちつちやい穂菜ちゃんの方がいいのかあ！？」

「そろそろセクハラ発言はやめるエロおやじ」

「おやじい？わたしや男じゃないよ！何快斗いつの間にかそつちに目覚めちゃった？いやいや引くわー！やっぱりわたし夕馬の愛人になるう！夕馬ー！さつき結婚するって言ったもんねえ。絶対だからねえ！あ、赤ちゃんはダメだよ。わたし養えないから」

「……毎度のことながらわりいな二人とも」

「別に、気にしなくて言いよ。千佳音らしいっちゃらしいから」

「夕馬くんっ。私だって出来るんだよ？ただやらないただかもんっ。やれって命令されればやるもんっ」

「はいはい、そうだね。それよりそろそろ酒が回ってきたからおねんねしようね」

そう言われて頭をなでられる。

「そんなあ、私全然酔ってないよあ？でもなでなでしてくれるなら言う通りにしてあげるう」

そう言ったら夕馬くんはなでるところか優しくだきしめ、その上頭をなでてくれた。

「よしよし、これでどう？眠くなった？」

「はああああああ、きもちいいいいいいいい」

だんだん瞼が重くなっていく。

「あぁっ！夕馬くんちズルい！お父さんわたしもやってほしい！！」

「はいはい」

千佳音ちゃんと快斗君の声がぼんやりと聞こえる。

いよいよ寝てしまいそうだ。

そうなる前に夕馬くんに話し掛ける。

「ゆーまくん」

「ん？」

「けっこんおめでとー」

「……うん、ありがとう。穂菜も結婚おめでと」

「へへっ、ありがとう」

そして、

こんな幸せな今日から一年、

正確には三百六十二日後。

「はい、こんな感じでいかがでしょうか？」

メイクさんが声を掛けてくれた。

「うわぁ……」

私は鏡を見て感動を覚える。

純白のウエディングドレスを着た私に。

今日は遂に夕馬くんととの結婚式だ。

今の今まで大変だった。

主に周りからの結婚式の催促で。

結婚したという報告をしたら、ほぼ毎日いろんな人から私たちにメールが来た。

こついうのは私たちの一番の記念日にやりたい、だから待ってて、という理由を告げでもお構いなしだ。

正直何度ノイローゼになりそうになったか。

そこは夕馬くんが優しくしてくれたから何とか耐えたけど。

今日のためにたくさんの人が来てくれた。

それを自分の目で見て確認したときは凄く嬉しくて、結婚式が始まってもしないのに泣きそうになった。

この嬉しさはColeyさんという方から小説の初感想をくれた

ときの嬉しさに匹敵する。

私の今着ているウエディングドレスはシンプルなものだった。フリルやレースも少なく、胸元にリボンがあしらわれているくらいだ。

これを選んだのは値段が手ごろというのもあるんだけど、一番の理由はあまり派手に着飾りたくなかったからだ。

お祝い事なんだから綺麗な服を着るべきなんだろうけど、だからこそ、自分の大切な日だからこそシンプルで、自分自身で行きたいと思った。

夕馬くんに話したら、『それでいいと思うよ。無理に着飾る必要はないし』と言ってくれた。

「ありがとうございますつ。その、自分で言うのもなんですが、綺麗です」

「どういたしまして」

にっこりと笑顔で返される。

コンコン。

するとメイク室のドアが叩かれた。

「すみません、長嶋ですが、入ってもよろしいでしょうか？」

千佳音ちゃんだ。

ここで千佳音ちゃんを追い返す理由もないので招き入れる。

「どうぞ」

「失礼します」

扉が開くと、千佳音ちゃんだけでなく梨久ちゃんと董ちゃんもいた。

「あ……穂菜ちゃん」

最初に口を開いたのは董ちゃん。

「ん？」

「いや、凄い綺麗だよ。ねえ？」

「うん、穂菜凄い」

「へへっ、ありがとう」

「……………」

董ちゃんの呼びかけに梨久ちゃんは答えるけど、何故か千佳音ちゃんは黙ったままだ。

「千佳音、どうしたの？」

「へ？あ、ごめんっ、普通に見惚れてた……。穂菜ちゃんすごいよ」

「千佳音ちゃんもありがとう」

「じゃあ穂菜さん、私は席を外しますね。何かあったら呼んでくだ

さい」

気を利かしてくれたメイクさんが外に出てくれた。

「ねえ、そういえば董ちゃんと梨久ちゃん知り合いだったの？」

「まね。て言っても五分前にだけど」

「千佳音経由でね。さっきそこではったり。私は梨久さんのファンだったから千佳音に紹介してもらって」

「そういうこと。……ねえ穂菜ちゃんさ、凄い綺麗すぎない？」

千佳音ちゃんが顔をのぞきながら聞いてくる。

「そう、かな？メイクのおかげかも」

「あーいや、そんなメイクだけでこんな変わるとは思えないんだよね。昨日会ったのは全然違う」

「そりゃそうでしょ」

と梨久ちゃん。

「結婚式よ？結婚式。そんな一大イベント直前になったら内面も変わって綺麗になるって」

「まあ女なら当然だよな」

「ちょっと董、なんかその言い方わたしは女じゃないって風に聞こ

えるけど?」

「いやいや、千佳音はおっさんでしょ? 樋口の夕馬君とか源の快斗君からもよく聞くよ?」

「あんのあほんだら! よりにもよって梨久に言う? なんか恨みでもあるのかしら?」

千佳音ちゃんがぶつぶつ言っていると、董ちゃんが話し掛けてくれた。

「穂菜ちゃん、緊張してる?」

「うん。もう心臓バクバク。ほら、私職業柄人前に出ないから余計に……」

二人にはいつだったか仕事については話した。

「そっぴやそっぴだね。演劇の私とは正反対。そっぴや千佳音はニート抜け出せた?」

「え、千佳音ニートなの!? この不景気のなかないわ。あ、いや、不景気だからなのか」

「あぁっ! 何勝手に言ってるの!? もうちゃんとコンビニのパートやってるって。言わなかった?」

「言われてはない。メールじゃ見たけど」

「そんな屁理屈いらんっ! って、わたしの話じゃなくて、穂菜今更だけどほんとにその服でいいの? あ、いや可愛いんだけど、ちよっ

と味気なさすぎない？」

「いいの。なんかいろいろつけて派手にしちゃうとさ、自分を偽ってる気がしちゃうんだよね。つけねばつけるほど自分を隠しちゃうみたい。だから生身のまま、最低限の衣装で挑みたいの」

「へえ、穂菜ちゃんも結構考えてやってるんだね」

「一応は、ね。大切なことだし」

「あ、そだ。穂菜ちゃん行っておかないといけないことあったんだ」

千佳音ちゃんが思い出したように言った。

「何？どうしたの？」

「お願いがあるんだ」

「お願い？」

「わたしにブーケをください」

ぺこりと頭を下げる。

「いやあちょっと待ってよっ！千佳音ちゃん快斗君ともうラブラブでしょ？いらないんじゃないかな？」

「いやもつとラブラブしたいっ。目標は穂菜たち程度までいきたい」

「「ちょっと待ちなさい」「」

千佳音ちゃんの言葉を董ちゃんと梨久ちゃんが同時に止める。

「千佳音、その目標だけはやめたやほうがいい！気が触れるぞ!？」

「ほんとにこれは親切心で言うけど！一回あの二人のバカップルぶり見たとき、正直引いたわ！！あんないちゃつきはない!!」

……梨久ちゃんと董ちゃんがひどいことを言った。

別に私たちの間は気が触れる言葉とか引かれるに言葉は言っていないし。

「あ、そろそろ時間かな」

千佳音ちゃんが備え付けの時計を見て言った。

「じゃ、穂菜ちゃん。本番で噛まないように気をつけてね」

「うつ、き、気をつけます……」

少しでもテンションが下がると、向こうは逆にテンションを上げて出て行った。

「ふう」

大きく息をついて椅子に座る。

緊張のせいもあってか少し疲れた。

するとまたすぐに扉が開く。

今度はタキシード姿の夕馬君だった。

「あ、夕馬くん」

こちらに歩いてくる。

「どう穂菜？お疲れのようだけど」

「ん、千佳音ちゃんたちがさつき来てくれて、緊張のせいで凄い疲れた、かな。夕馬くんは？緊張してる？」

「あんまり、してないかな。正直言っちゃえば、結婚式やったからって何かが変わる訳じゃないでしょ？ずっと一緒。僕が穂菜を愛して、穂菜が僕を愛して、それを快斗と千佳音がからかって。それは変わらないから緊張はしてないよ」

「まあ、確かに変わらないけどさ、でもやっぱり結婚式だから恥ずかしいよ」

「そんな簡単には切り替えられないか」
ひとつ間を空けて、わたしの名前を呼んだ。

「穂菜」

「何？」

「可愛いよ」

「あれ、可愛いなの？」

「うん。可愛いよ。なん　　ああ、千佳音たちが何か行つたの？綺麗とか」

「な、なんでわかるのそんなこと？」

「まあ考えれば分かるよ。それより、嬉しくない？可愛いじゃ」

「ううん。凄く嬉しい」

「ならよかった」

しばらく心地好い沈黙が流れる。

「あのさ」

夕馬君が口を開く。

「本当に今更かもしれないけど、あの時僕を選んでくれて本当にありがとう。穂菜のお陰で僕は幸せだったよ」

「ちょっと夕馬くん？なんかお別れの言葉見なくなってるよ？」

「ああごめんごめん。そんなつもりはなかったんだけど。ただお礼が言いたかっただけ。今まで一緒にいてくれてありがとう。これからも一緒にいてください」

「もう夕馬くん。結婚式直前の言葉じゃないよ。一緒にいるから結婚式やるんだから」

私は苦笑した。

「それはそうなんだけどね。今思ってるのはこれな訳だし。ごめんね、いい台詞全然出てこなくて」

「大丈夫だよ。無理に言葉にしなくても、それなりには夕馬君の気持ち、分かってるつもりだよ。私も夕馬くんと一緒にいたいよ。ずっと一緒にいたい。おじちゃんおばあちゃんになっても一緒にいようね」

自然と笑みがこぼれた。
いつの間にか、緊張もほぐれている。

「うん。ありがとう」

「どういたしまして」

「もうひとつ、いいかな？」

「なあに？」

「改めていいます。僕は、穂菜が好きです。愛します」

私は目を見開いた。

言葉にではない。

あの夕馬くんが、満面の笑みを浮かべている。

とても柔らかくて暖かくて、何より幸せそうな笑みを。

私は、暖かくなっている胸を抑える。

すると我慢の限界が来て、涙が溢れ出てしまう。

「え、穂菜？どうしたのっ？」

夕馬くんが少し焦る風にして話しかけてくる。

「うん……あのね、私、夕馬くんときあい始めてね……ひとつだけ自分に課題を出したの」

「課題って？」

涙で声が震える。

それを少しでも抑えて、なんとか喋れるようにする。

「夕馬くんをね、笑顔にすること。子供の頃夕馬くんが千佳音ちゃんに向けた笑顔を、私がして上げること。私、ずっと千佳音ちゃんに嫉妬してたの。私の見たことのない夕馬くんを知ってて。だから絶対夕馬くんを笑顔にさせるんだって。あ、誤解してほしくないんだけど、千佳音ちゃんのことを嫌いなわけでも、今までが幸せじゃないってことじゃないよ。でもね、八年間ずっと笑顔にすることを考えてね、それが今日叶ったことが本当に嬉しくて、嬉しくて……」

私は夕馬くんの胸に飛び込む。

「夕馬くん、ありがとう。私を好きになってくれて。私を愛してくれて。私を傍で支えてくれて。私に、最高の笑顔を見せてくれて。私も夕馬くんのこと大好きです。絶対、夕馬くんの傍から離れません。私のこと、一生愛してくれますか？」

「うん。愛するよ」

即答してくれた夕馬くんは、優しく抱きしめてくれた。

そして自然と顔を近づけ、キスを交わした。

それは今までのどのキスよりも熱く、短かった。

「穂菜、そろそろ行こうか」

「うんっ！」

私たちは腕を組み、幸せを胸に抱き皆の元へ足を運ぶ。

私は願う。

どうか私たちの幸せがいつまでも続きますように。

皆に願う。

どうか私たちの幸せが皆の元へも届きますように。

幸せの在処は皆人それぞれ。

同じ物なんてありはしない。

でも、だからこそ必ずひとつは皆の幸せはある。

その一つを、私は見つけた。

見つけていた。

私のそれは人を愛すること、人から愛されること。

心が温かくなり、気持ちが高鳴る。

こんな心地好いものを皆にも知ってもらいたい。

自分の幸せが遠くにあっても諦めないでほしい。

自分の幸せが消えそうになってもあがいてほしい。

一人の幸せは、周りにも広がっていく。

だから。

私は願う。

どうか私たちの幸せがいつまでも続きますように。

皆に願う。

どうか私たちの幸せが皆の元へも届きますように。

第十話 『これから先、どんなことがあっても幸せです』（後書き）

夕馬「皆さん、今まで『その想いは変わりますか？AFTER STORY』を拝読していただき、ありがとうございました」

快斗「H23・4/30、第十話をもちまして、この小説は完結しました。ここまで続けてこれたのも、読者の皆様が応援してくれたおかげです」

千佳音「高校時代のわたしたちを見てくれた方は六十話、九ヶ月と十六日。AFTER STORYから見てくれた人は十話、一ヶ月の間、お疲れさまでした」

穂菜「私たちの活躍はもう終わってしまいますが、ふと思い出してくれると嬉しいです」

千「とまあこんな堅っ苦しい挨拶はその辺で、終わっただけだ！」

快「そうだな。俺は正直二回もエンディングが見れるとは思ってなかった」

穂「まあこれ結構思い付きで始めた奴だからね」

夕「作者曰く、僕の笑顔はほんの三日前に思いついたんだって」

快「ほんと思い付きだな」ってあれ？今思うと俺だけ夕馬の笑顔見てない？」

夕「……快斗、僕は快斗に笑顔を見せるフラグは立ててないから、

いくらそつちの人でも無理だよ?」

快「俺は正常だ!」

千「ねえ、これどうなるんだろう。まさかさ『その想いは変わりますか? AFTER STORY AFTER STORY』とか始まらないよね?」

穂「それは、流石にないと思うよ?無理ありすぎるし」

夕「だろうね。多分『その想いは変わりますか?』シリーズは、何か強い要望が複数ない限り終わりだよ」

快「じゃあそろそろ最後の挨拶を」

夕「Collettyさん、kittieさん、感想をありがとうございました。二人の言葉はかなり励みになりました」

穂「総合評価12pt、お気に入り件数6件。この六人の方々、お気に入り登録してくれてありがとうございました。楽しんでくれたでしょうか?」

快「PV1550、ユニーク484。これだけの人に来てくれて、見てくれたのには感謝してもしきれませ」

千「感想や評価は終わった後にもいつでも受け付けています。気軽に文を送ってください。では皆、せえのっ!」

穂&夕&快&千「……今まで、ありがとうございましたっ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0684s/>

その想いは変わりますか？ AFTER STORY

2011年11月11日04時15分発行